
茶釜と狐と怨霊と

鷺嶺綺羅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

茶釜と狐と怨霊と

【Zコード】

Z3810E

【作者名】

鷹嶺綺羅

【あらすじ】

萌子の母から水瀬の元に来た依頼は、「茶釜」の探索。すっかり忘れた頃、不可思議な連続殺人事件が起きる。その背後には、水瀬にとって最重要人物の影が……。「胸と着物とお茶」の全面リニューアル作品を目指します。でも、あまり比較しないでくださいね？……作者が惨めになるので（涙）

第一話

水瀬邸 茶の間

ある日曜の午後のことだ。

「水瀬君」

茶の間に入ったルシフェルの日の前で、水瀬がコタツで眠つていた。

丸くなつて幸せそうな寝顔を浮かべる水瀬を見ると、なぜか猫を連想してしまつ。

猫はコタツで丸くなるし、寝る子は育つといふナビ、少なくとも、後者は水瀬君限定でウソだ。

ルシフェルはそう思う。

いつも寝てばかりなのに、水瀬君は心身共に成長しないじゃない。

クー……スー……

水瀬の穏やかな寝息が午後の気だるい雰囲気をさらに気だるくさせる。

「……もつ」

時計を見たらまだ午後2時。

お昼まで寝ていて、さらに寝るのか？

ルシフェルはあきれ顔で水瀬に近づくなり、乱暴に水瀬の肩を揺すつた。

「水瀬君っ！」

「……ふえ？」

水瀬は寝ぼけ眼のまま、ぼつとした視線をルシフェルに向ける。あれ？

なんで？

水瀬が現実を受け入れられずにいるのは、表情でわかる。

「……ルシフェ？」

その言葉が、水瀬の口から出でてくるのにま、時計の秒針を一回転

させる必要があった。

「もう……いつまで寝ているの？お口タしまつやつから

「……うん」

「どうでもいい。

水瀬の顔はそつ言つていた。

いや。

ルシフェルは、水瀬の瞳の奥に隠れた別な感情を見逃さなかつた。

「何？」

「えつ？」

「す」い、不満つて顔だよ？起こされたの、そんなにイヤだつた？

「……」

こんつ。

水瀬が額をコタツの天板に額を乗せて沈黙。暗にそれを認めた。

「……いつそ」

そのままの状態で、水瀬がポツリと言つた。

「夢のままだつたら、どれだけ幸せだつたらうなあ

「何？そんなに楽しい夢でも見ていたの？」

「……うん」

クスン。

ルシフェルから水瀬の表情は見えないが、どうやら泣いているらしい。

「クスッ。何？カワいい女の子でも出てきた？」

ルシフェルは、悪戯っぽく訊ねた。無論、それは彼女にとって、他愛もない冗談に過ぎない。目の前の男の子にとって、意識する異性なんて、一人しかいないのに。

だが、

「女の子じゃなくて」

水瀬は、ルシフェルの予想もしなかつた言葉を口にした。

「女性だよ」

「えつ？」

「立派な女人……はあ」

「……瀬戸さんに告げ口しちゃうから」

「……どうでもいい」

「えつ？」

ルシフェルは目を見開いた。

瀬戸綾乃。

自称、水瀬の許嫁。

その嫉妬深さと暴走のすさまじさは、水瀬を震え上がらせて止まない。

その相手さえ恐れない。

水瀬はそう言つたのだ。

「な……ウソでしょ？ まだ寝てるの？」

「本当だよ」

水瀬はようやく顔を上げた。

“あの人”のことは、例え綾乃ちゃんでも悪口言つたら許さないんだから

「……」

「それで、どうしたの？」

水瀬から聞かされた言葉に、ルシフェルは危うく自分が何を水瀬に告げようとしていたか、忘れる所だった。

「お父様とお母様が夜、いらっしゃるそつよっ」

「何しに？」

「私の着物探しに銀座に来てるんだって」

「……ああ、ルシフェ、茶道始めるんだっけ？」

天板に顎を乗せた水瀬は、ぼうつとした顔で、ついさっきまで見ていた夢を思い出していた。

夢の中で、水瀬は一人の女性を抱いていた。

互いに愛を囁き、恍惚としたまでの肉欲に溺れていた。

夢とは夢想のことか？

違う。

そう。

それは、水瀬の過去。

現実なのだ。

例え夢の中といえ、そのすばらしさは例えようがない。

「所で」

ルシフェルがその華奢な腰に手を当てた。

「人事局の要請、また断つたそつだね」

「当たり前」

水瀬はにべもなく答えた。

「あの戦争の時の契約だって履行されていないんだよ。どうやって契約しろっていうの？」

「契約？」

近衛騎士団の契約は、金銭が普通。いく希に物納を希望する者もいるが……？

そういうえば、水瀬君って、いつもお金がないお金がないっていって、お父様から仕送り受けているけど、その辺、どうなんだろ？？。いくらを要求して、契約が履行されないんだろう？

水瀬君って、生活費以外のお金には淡泊なんだけど……。

「よく、わかんないけど」

ルシフェルは困惑気味に言った。

「でも、樟葉さん、困っているよ？」

「問題の契約、持ちかけたのは僕じゃなくて樟葉さんだもん

「何を

「契約したの？」

「……」

水瀬は、しばしの躊躇の後、言った。

「笑わない？」

「笑わない」

「絶対？」

「笑つたら」「

ルシフェルは少し考えてから言った。

「一週間、お昼、好きなものおひこってあげる」「……」

ルシフェルが、それほど深く考えていないのは水瀬にもわかる。
そんなルシフェルに水瀬は、ポツリと言った。

「お嫁さん」

銀座某着物店

「おい、いい加減にしろ」

うんざりという声をあげたのは、由忠だ。

開店時間に入つたのに、もう口が暮れる。

それでも妻のお眼鏡にかなうものがないうらしく、倉庫から出された反物はすでに山になっている。

妻の買い物時間の長さは、夫として身にしみてわかつていたが、今日は酷すぎる。

なにより、金額が最初の頃と比較して、優に3ケタ上がっているのはマズい。

「何を言つのですか？」

反物の山をバックに不満そうに答えるのは遙香だ。

「娘の初着物ですよ？親として、念には念を入れておかないと」

「だからといって、モノには限度というものがある…」

「そんなに不満でしたら、言つていいじゃないですか。クレジットカードだけおいていってくれればいいって　あ、そっちの反物も見せてくださいな」

「……それ、いくらだ？」

「「ひらはあいぐら? 2500万? いい柄ですわねえ」

「ちよつ! ? 僕を破産させる気か! ?」

「妻の私がいいと言つのです。それに、不満なうりもつと稼いでいらっしゃいな

同じ頃、東京都千代田区某所

「聞いてるの! ?」

広い和室に声が響く。

「聞いてますよお……」

「気のない返事が、相手の神経を逆撫でする。

「じゃあ、今、何て言つたか言つてみて!」

「要するに、拓也さんが冷たいって、そういういたいんでしょう?」

「そう! 聞いてたんだ」

「何度も聞かされれば覚えます。全く……人がオーパーショーンみてる時に邪魔するんだから」

「ママ……その姿、似合わない

不満顔で言つるのは、巫女装束に身を固めた萌子だ。

萌子が見つめる先、そこには、同じように巫女装束を纏つ母の姿があつた。

巫女がネットオークションに打ち込む姿は、確かに似合わない。

まして、その中身の正体を知れば尚更だ。

「大体、オークションって、何探しているの?」

「お値打ちモノ」

「?」

母の背後に立つた萌子は、画面を見る。

「何? 夫を立身出世させる方法教えます。著者山内千代? 支

払いは一括。送料無料?」

「他にもね? 名物茶器「平蜘蛛」高値で買いつりますだって。売ろ
うかしら」

「誰が？」

「織田信長さん。あの人、生きていたのねえ。そり言えど、あの釜、どうしたつけ」

巫女はパソコンの前から立ち上がると、部屋から出ていった。「確か……あら？ 何かに使ったはずよねえ。何だつたかしら？」

翌日 葉月市 夢幻茶道教室前

「ありがとうございました」

深々と頭を下げて居るのはルシフェルと萌子だ。

「いえいえ。水瀬さん。よければ通つて下さいね？あなた、かな
り筋はいいから」

人の良さそうな初老の女性がそういうてルシフェルに教室の案内
を手渡す。

「ありがとうございます。帰つて家の者と相談してみます」

茶道教室近くの喫茶店

萌子があんみつを食べながら言つた。

「お姉様が茶道に興味があつたなんて知らなかつた」

「うん。お茶は好きだから。むしろ、萌子ちゃんが通つていたのに
驚いた」

対するルシフェルはお茶に白玉団子。

ルシフェルに言わせると、「お茶＝団子」は黄金律だ。

「へえ。私なんて稽古事程度にしか考えてないから、お姉様はやつ
ぱりスゴイです」

「お茶、おいしくない？」

「苦いだけです」

きつぱりと言い切る萌子は薄い桃色の着物姿。対するルシフェル
は制服姿。

学校の帰り道で茶道教室の張り紙を見つけたルシフェルが、どう

したものかと教室の中をうかがっていた所を、この教室に通つ萌子により、中に連れ込まれた帰りだ。

「足、痺れるとか？」

「普段から正座には慣れてるから、それは平氣」

「水瀬君は、それがイヤだから茶道はしたくないって

「お兄ちゃん、そういうところズボラだから」

「言えてる

「クスクス笑い会つ一人。

「あ」

萌子は、ポンッと手を打ち、巾着の中から手紙をとりだした。
「ルシフェルさんかお兄ちゃんのビッちかに渡してくれつて、ママ
に言わっていたの」

「私達に？」

差出人は、確かに水瀬とルシフェルの連名になつてゐる。
だが、

『江戸府内何処か』

としか住所が書かれていない。

「これで届くと思ってるの？つていうか、江戸つて……」

「ママの感覺つて、こうだから……恥ずかしくて」とうつむく萌子。
中身は和紙に達筆な筆で何かが書かれているが……。

「ゴメン。こういうの、まだ読めないの」

ルシフェルは何度も見直した後、申し訳なさそうに手紙を封筒に
しまつた。

あまりに達筆すぎて、ルシフェルには、これが文字なのか、単に
筆で複雑な線を書いているのか、それすら理解できなかつたのだ。

「帰つてから、水瀬君にでも読んでもらひ」

「読みましょうか？」

そういうて左手を出してくる萌子だが、なぜか右手には、ルシフ

エルの団子があつた。「読めるの？」

ルシフェルは、こいつ何々しい所は、さすがあの水瀬君の妹だ

と思つたが、あえて無視して、手紙を萌子に渡す。

「娘ですから」

萌子は手紙を取り出しながら言つた。

「困るんですよ。ママの時代がかつた書き方つて。本人は、これが最先端の書き方だつて信じて疑つていらないんです。で、小学校の時、母が手紙で私の欠席を伝えたことがあるんです。そしたら、学校の先生達、何て書いてあるかわからなくて、私が説明するまで、私は無断欠席扱いだったんですよ？」

いいつつ、ざっと母親の手紙を見た萌子の表情が固まる。

「どうしたの？」

「えつと……これ、仕事です」

「仕事？」

「”平蜘蛛の釜”をなくしたから探してくれつて

「何？それ」

翌日 明光学園大食堂

戦国時代、松永久秀という武将がいた。

主家を滅ぼし、將軍を暗殺し、東大寺大仏殿を焼き払うという史上希に見る悪事を成し遂げ、織田信長に謀反をしかけるが居城信貴山城を織田軍に包囲され、1577年10月10日壮絶な爆死を遂げている。

「その久秀が持つていたのが、平蜘蛛の茶釜だよ」

そう説明してくれたのは博雅だつた。

「正確には、古天明平蜘蛛。こてんみょうひらぐも信長が所望し、差し出せば久秀を助命するとまで言わしめた天下の名物」

「引き渡したの？」

「いや？一説には、”久秀の白髪首と平蜘蛛の茶釜だけは信長に渡

さない”とかなんとか言つて、茶釜と自分を鎖で結びつけ、茶釜の中一杯に火薬を入れて火を付けたとも　だから、久秀は、日本

で初めての爆死による自殺者とも言われるんだ

「……まあ、歴史上じや、そうなつてるよねえ

と、何でもないといわんばかりの口調で言つるのは水瀬。

その目の前には、ハンバーグの載つたA定食とエビフライの載つたB定食、さらにアイスやジュースが並んでいる。

「それがどうしたんだ？」

おいしいおいしい。と、ホクホク顔の水瀬と、素うどんを食べながら苦り切つた顔をするルシフェルを前に、博雅が首を傾げた。

「歴史小説にでも興味が？」

「あのね？」

ルシフェルが言つた。

「それ、探してくれつて頼まれて」

「……ルシフェル。俺の話聞いていたか？あれは数百年前、既にあつ！」

博雅が驚いた声をあげ、額を軽く叩いた。

「すまん。平蜘蛛なんていうから、てつきり久秀の方かと思つたけど、それなら違うな」

「違う？」

「ああ。「平蜘蛛釜」の方だろう？」

「どう違うの？」思わず水瀬とルシフェルが顔を見合させた。

「平蜘蛛釜」は、蜘蛛がはいつくばつているような形をした茶釜のことだ。これならあちこちにあるはずだ。南部鉄器とか

「ないはずの物と、ありすぎる物……かあ」

水瀬がフォークを口にくわえながらぼやいた。

「極端だねえ」

「おい。水瀬？誰か、平蜘蛛釜を欲しがつていいのか？」

「……詳しく、話を聞かないとダメみたいだね」

「？」

「水瀬君……私、よく知らないんだけど、あの人って、何者なの?」「僕も詳しくは知らないよ。ただ、もの凄い凄い過去があるとは聞くけどね。博雅君の言つ爆死つて、あの人気が証拠隠滅しただけかも……そうだ、ルシフエ。茶道、教えてもらつたら? 千利休本人に習つたらしいから」

「……」

「多分、本人が言つてるのは、久秀と共に失われたはずの方の平蜘蛛の茶釜だよ。そんな貴重な物、なんでなくすかなあ」「誰かに貸したまま、忘れていたとか」

「なんだか、あの人のことだからあり得るのが恐い」「なあ、誰のことだ?」

「ゴメン。それは内緒。ただ、やんごとない身分の方としか言いようがない」

「そ、そつか……」

「気を悪くしないでね」とルシフエル。

「これ、博雅君のためだから」

「あ、ああ……わかつているが」

「?」

「どうやって探すんだ? そんなもの」

「聞いてみる。きっと随分と厄介な理由があるはずだから」

第一話

夜 東京都千代田区某所

「あの頃、茶器にはもの凄い意味があつたのよ」

訊ねてきた水瀬達を前に語り出したのは、萌子の母親だ。とても東京都内とは思えないほど広い和室の真ん中に差し向かいに座る二人から手みやげを受け取つた萌子の母親は、嬉しそうに包みをほどきにかかり、母親の横に座る萌子が顔をしかめた。

「茶器一つが一国に匹敵する意味を持つといえれば、考えられる?」

あら。芋ようかん?私、大好き。

萌子の母親はどこからか短刀を取り出してその場で切り始める。

「博雅君　　いえ、友人から聞きましたけど」

あの短刀、たしか国宝だつたなあ。と、水瀬は困惑気味の顔で訊ねた。

「いつのことです?」

「天正年間あたりかしら?」

「?」

「俗に言つ戦国時代ですか?」

「最近ではそう呼ぶわね」

萌子の母親は、同じじることなくお茶を一人に勧めた。

「あの当時、私と私の率いた一団は、その値打ち物を求めて、戦場を渡り歩いていたわ。本能寺に忍び込んで、大量の茶器をノブさんから横取りしたあの時の爽快感は、いまでも忘れられないわ。まさかミッキーがああいう行動に出るのは予想外だつたけど」

いい証拠隠滅になつちやつた　と萌子の母は笑つた。

「ノブさんとかミッキーって?」

「多分……織田信長と明智光秀のこと。違います?」

「そうですよ?ミッキーの軍勢が邪魔だつたから、ちょっと唆したノブさん殺しに行くんだもん。びっくりしちやつた」

「……本能寺の変」

「懐かしいわあ」

どうですか？と、どこから出したのか、小皿に載った芋羊羹とお茶が水瀬達の前に出された。

「でも、それだけの値打ち物でも、たかが茶釜でしょ？タヌキが出てくるわけでもなし」

「お兄ちゃん、それ違う茶釜」

「似たようなものよ」

「へ？」

「その後、ヒマだったし、材料たくさんあつたから、天保の大飢饉の時に魔導実験したのね？」

「魔導実験？」

「そこら辺に転がっている死体、たくさん集めて妖魔を作る実験。出来はしたんだけど、それを封じておく適当な器がなかつたから当時はもう、茶器の価値も急落していてね？これでいいやつて、その茶釜使つたのよ」

「……」

「……」

「……」

「あれは私の最高傑作の一つ。もつたいなくてとつておいたはずなんだけど」

「で、その妖魔つて？」

「蜘蛛よ」

「蜘蛛？」

「そう。糸を吐くアレ。平蜘蛛の茶釜に蜘蛛の魔物

因果ねえ」

「うつとりとした母の前で、萌子は呴くように言った。

「……因果を作つたのは誰よ」

事件は2週間後に起きた。

犠牲者は茶道教室の先生で、武田という女性。

事件の直前、武田は一人で茶室に入ったといつ。

弟子の一人が、茶菓子を持って茶室に向かう途中、茶室からの悲鳴を聞きつけ、茶室に入った所で現場に出くわした。

「何をどうやつたら、ここまで出来ることが出来るんや?」

京都府警の堀警部は、赤く染まつた茶室を眺めながら呆れたような口調で言った。

「この狭い中で人間を粉々にするやと?」

「切り刻んだ。と言う方が正しいです」と部下の飯田が言った。

「死体には生前に切断された痕が

「じゃ、どうやってや? 刀で切り刻んだとでもいうんか?」

「それが、へンなんですよ

「何がや」

「いえね? 検死医の神田センセが言つには、切断の痕は、みんな生前につけられたものだつていうんです」

「それがどうした?」

「生きたままの人間を、短時間に、粉々にするなんて、不可能ですよ」

「騎士なら出来るやろが」

「この狭い茶室で、どうやつてですか?」

確かに天井が低く、これでは刀は振るうことは出来ない。

「何やろな……で、なくなつているモノは?」

「それが

「何や」

「茶器は一通りあるのに、なぜか肝心の茶釜が、ないんです」「はあ?」

京都某撮影所

「はいカツト！」

撮影は順調だった。

何しろ、今回は綾乃をヒロインとしたチャンバラ物。
瀬戸綾乃時代劇初挑戦とあって、話題性も十分な上、こつも撮影
が順調なら、事務所としてもこれに勝る嬉しいことはそうない。

「はあ、これで後は夜に一杯、どうです？」

綾乃の所属する事務所から派遣してきた新井が、助監督に意
味ありげな笑みを浮かべながら誘う。

「河原町に店、とつてます」

新井の含む所がわかる助監督は、苦笑に顔を歪めた。

「新井はん、お好きですか」

「これがなくて、何が楽しみですか

カソッ

笑つた拍子に、新井の足が何かに当たつた。

「ん？」

「何です？」

新井と助監督がのぞき込んだのは、時代劇の小物が雑然と積ま
れた棚の下。

よく見ると、茶釜だ。

「何でこんなものが？」

「タヌキが化けてるんですかねえ」

「はん。ま、いいですわ。ヤカンのかわりになるでしょ。もうつて
いいですか？」

「東京までもつてくつもりですか？」

「こんな所に放り出してあるつてことは、不要品でしょ？近頃、鉄
分不足なんで」

「ま、いいでしょ」

一週間後 東京都葉月市内

「で、どういうこと？」

鑑識の合間を縫つて現場入りした理沙は、血まみれの台所を一瞥した後、部下に聞いた。

「何？近頃、この辺じゃこういう事件が流行なの？」

「知りませんよ。　ああ、犠牲者は台所で何かしょくとして、そこを殺されたというところですな」

「台所で切り刻まれた理由と方法は？」

「不明です。

あ、犠牲者は池田里奈子25歳。職業は美容師。モデルのメイクを手がける事務所に所属しています」

「交友範囲を洗つて。それから、現場からなくなっているものは？」

「それが、警部補」

部下の一人が、理沙を台所のコンロに案内した。

「コンロがついたままです」

「コンロが？」

「ええ。第一発見者は、害者と同棲している新井貴文36歳、職業は芸能プロデューサーです。タバコを買いに出た帰りに、事件に遭遇したといっています」

「アリバイは？」

「マンション、コンビニ、町内の防犯カメラ、すべてに映像が残っています。時間的にはあり得ません」

「新井に、コンロがつきっぱなしの理由は確かめた？」

「それが

部下は困惑した顔で言った。

「ヤツは、コンロには茶釜がかかっていたというんです」

「茶釜？」

「はい。京都の撮影所でもらってきたもので、鉄で出来たヤカンの代わりになるかもしねないって、水を入れて火にかけていたそうで」

「はあ？」

同じ頃 月ヶ瀬神社 水瀬邸

その頃、水瀬達は、依頼者まで含めて、茶釜の存在を忘れていた。
「あればあつたでそのうち出てくるでしょうし、もしかしたら、廃品回収に出しちゃつたかもしないし」

肝心の萌子の母親が、そう言い切ってしまったのだ。

何か厄介な代物だけど、実害がなければいい。

手がかりどころか、今の時代、本当に存在するかわからない代物を一々探す程、水瀬達も醉狂ではない。

むしろ、今この瞬間が事件と言えるほど、騒ぎが多い水瀬達の年頃では、とくにそうなる。

「遅い」

水瀬邸の縁側で、そう呟いたのは博雅だ。

長野の水瀬本家の倉の中から古い雅楽の楽譜が出てきたと聞いて勇んで来たというのに、肝心の水瀬が「制服に着替えてくるね」と姿を消してからすでに10分以上。

男の着替えにしては遅すぎる。

楽しみにして来たというのに、あいつは何を考えている。

「つたく、あいつ、何をしているんだ?」

笛を袋に戻した博雅は腰を上げると、水瀬の部屋を探して歩き出した。

歩いてみると、意外と広い。

幾度か角を曲がった先、襖の向こうから「わい」と音がする。ここが、水瀬の部屋らしい。

「おい水瀬！」

博雅は、声をかけながら、襖を開けた。ノックもしないで……。

同じ頃 水瀬邸ルシフェル私室

ルシフェルは、茶道教室に通うため服を脱いだ。

着物の着付けは、練習したおかげで一人で出来るようになった。

だが

「……」

着付けの本に書いてあった。

下着は着けるとラインが出る。

見られたいものではない。

ルシフェルは、タンスを開くと、一番奥に隠すようにいれであった一枚を取りだした。

これならラインが出ないだろうけど……。

ルシフェルは、それをみつめながら唸つた。

もし、何かの弾みで博雅君にこんなのがついているのを知られたらどうなるだろう。

誤解されるだろうか。

軽蔑されるだろうか。

しかし

。

ルシフェルは鏡の中の自分を見て覚悟を決めた。

私だってオンナだ。

これをつけてもいい位の年頃だ。

よし。

ルシフェルは意を決してそれを身につける。

ちらと鏡に映った自分の姿を見るが、やはり何だか恥ずかしい。自分が好色な女になつたようでいやだ。

やはり今すぐにでも別な下着に取り替えたい。

でも、ラインが出て、それを指さされるなんてこともごめんだ。

ようは、知られなければいいんだ。

そう思い直したルシフェルが長襦袢に手を伸ばした時。

ガラツ

不意に襖が開くと同時に、唯一見られたい（本心）、最も見られ

たくない（建前）相手が顔を表せた。

「おい水瀬！」

「……」

しばし凍り付いた二人は、しばらくの間、凍り付いていた。
そして、それが理解できた時。

博雅の視線は、全裸に近いルシフェル、こと、やたらと色っぽい下着に釘付けになつた。

「きやああああああつー！」

胸を隠してうずくまるルシフェルにも、その悲鳴すら、釘付けになつた彼の視線を外すことはできなかつた。

あくまで博雅の視線は、ルシフェルの白い肌に描かれた丁の字に食らいついで放そとはしなかつた。

「あ、じ、じめん！」とはいうものの、だ。

「で、出て行つて！」というルシフェルの言葉も意味は成さなかつた。

「あ、じ、じめん！」

「せめて見ないで！」

「あ……じ、ごめん」

「これだけ頼んでも聞いてくれないのー？」

ガニッ！

手近にあつたものを片っ端から投げつけるルシフェルの攻撃を受け、博雅はやつと部屋から出て行つた。

「どうしたの？」

廊下の角から顔を出したのは、お茶を持つた水瀬だった。

「ルシフェの悲鳴が聞こえた気がしたけど」

「あ、ああ、なんでもない」

頭にひつかかったものをむしり取った博雅は、そう言って水瀬を押しやつて縁側に向かつた。

「？」

「ち、ちょっとな」

無意識に手にしたものをポケットにねじこんだ博雅は、水瀬に作り笑顔を浮かべ、何とかごまかそうとした。

「博雅君」

「？」

「鼻血、出ているよ？」

「テッシュ、あるか？」

「……」

「……」

「……」

「……」

しばらぐした後、着物姿で出てきたルシフェルを、博雅は軽く100万回は惚れ直していた。

青を基調とした落ち着いた中に、ルシフェルの秘めた華やかさが醸し出されている。

それは、どんな芸術家だつて具現化させることは出来まい。そのあり得ない美が、博雅の目を釘付けにして離さない。

「ねえ……博雅君、何かいってあげたら？」

「えつ　あつ、ああ

」

水瀬に促されたものの、言葉が思いつかない。

「惚れ直した？」

「もちろん　つて、何を言わせるー！」

「だつてさ。よかつね、ルシフェル」

しかし、一人は顔を合わせようとしない。視線を合わせられないのだ。

そうこうことこのこととん鈍い水瀬は、不思議そうと言つた。

「どうしたの？」

「な、なんでもない」

「ふうん……あ、ルシフェ、遅れるよ?」

「う、うん……」

ようやく、ちらりと博雅を見たルシフェルが小さく、呟くように言つた。

顔も声も痛々しいまでに涙ぐんでいる。

「……エッチ」

それを聞いた博雅は言下に言い切つた。

「せ、責任はどう!」

水瀬邸 玄関

楽譜を受け取った博雅は帰り、責任つてなんだろう。と、水瀬が考えながら玄関の草むしりをしている時だ。石段を上がってくる女性がいた。

「あれ?」

「お久し」

理沙だった。

「珍しいね。どうしたの?」

立ち上がり、タオルで汗をぬぐつた水瀬に理沙が答えた。

「ちょっと頼みがあつてね」

「減棒の取り消し?」

「違うわよ」

理沙はバックから写真を撮りだした。

「ちょっと、厄介なヤマがあつてね? 力貸して欲しいの」

水瀬邸 縁側

「あんた、いい所に住んでいるのねえ」
応接を兼ねた広い縁側に通された理沙は、出されたお茶を飲みながら感心したように言った。

「つたく、世の中理不尽よね」

「よくわかんないけど、お姉さん、これ何?」

自分の前に広げられた数枚の写真を手にした水瀬が首を傾げた。

「すごく食欲なくすんだけど」

「現場写真。貴重でしょう?」

「見たくない」

「そう言わないで。助けると思つて」

「……まあ、いいけど。これじゃ、何が何だかわかんないよ」

「でしょうね」

当然とこう顔で頷く理沙は言った。

「下にパトカー停めてあるから、現場、見に行つてくれる?」

「タダで?」

「当然でしょ?」

加納萌子の日記より

ルシフェルお姉様が教室に通つて下さった最初の日。
とても嬉しい。

何より着物姿がとてつもなく似合ひ。
すつごい綺麗!!

着物は青。遙香様がお決めになつた柄だといつ。
さすがにいいセンスされている。

けど、やつぱり素材よ素材!

お姉様が髪を結い上げているの、初めてみたけど、もうスゴイ！

綺麗！きれい！キレイ！！！キレイすぎ！

褒める言葉がとっさに思いつかなかつたもん！

こんな綺麗すぎるお姉様と、横を並んで歩けるだけで、私、幸せ！

「きっと男の人なら絶対惚れますよ」と心の底から思う。

「今、オトコの人については忘れない」

ポツリと言つお姉様。

気になる。

「どうしたんですか？」

「ちょっと、色々あつて」

うーん。噂では、あの秋篠先輩と付き合つてはいる。あのゴツい朴念仁の何処がいいのか、私にはわかんないけど、まさか、あの人と何かあつたわけじやないよね？

気になりつつ、茶室へ。

居合わせた全員の視線がお姉様へ集中！

すゞい！居並ぶ他のお弟子さん達が霞んで見える！

茶道教室を初めて60年の師匠が両手放しで褒めちぎつけていたつけ。

『萌子さんと一人で着物のファッションショーが出来る』とか何とか。

でも、肝心のお姉様つたら。

「目立つのかなあ」とポツリ。

「そりや、目立ちますよ。こんな美人なら」

「うーん」

「どうしました？」

「あんまり、目立つのって好きじやないの。これから、どうしよう

つていうか、お姉様の場合、美人過ぎるから目立つなつて方がムチヤですよ」

「萌子ちゃんの方が可愛いと思つよ？」

「私がカワイイのは当然ですけど、カワイイと美人は別です」

「そういうものなの?」

「そうです。深みが違うんですよ。だから、どんなことしても、美人は美人なんです」

「よくわかんないけど、諦めろってことなの?」

「単純に言つて、そうです」

葉月市内警察署内

「やつぱり、わかんない?」

現場となつた部屋からの帰り、警察署で死体を確認してもらつた理沙は、廊下のベンチに座る水瀬に、残念そうに言つた。

「気になることがあるんだけどね。ありがと」

「コーヒー入つた紙コップを受け取りながら、水瀬はそう言つた。
「何?」

理沙も「コーヒー」を手にベンチに座る。

「あのね?殺され方なんだけど」

検死報告をめくる水瀬。

「検死報告に何か疑問点が?」

「これ、鋭利な刃物で切断されたつてあるでしょ?」

「ええ。スペツと」

「ちがう。これ、別なもの」

「別のモノ?」

「うん。すっぽり細くて強いワイヤーみたいなもので物体を締め付けて、それで切断したらこうなるよ」

どこから出したのか、水瀬はソーセージをナイフで切断した。

「これが、刃物での切られ方。でも、あの死体はそうじゃない」

「何でわかるの?」

「切断する時、刃物があたつた所には必ず痕が残る。インパクトし

た一ヵ所だけ。けど、この切断面、それが全面につこっている
ポケットから糸を取りだした水瀬は、一巻きソーセージに糸を巻
き付けると、一気に糸を両手で引っ張った。

糸の力に負け、ソーセージは一つに斬られた。

「こういう感じ」

はい。とソーセージを理沙に手渡す水瀬。

「やつぱり、第三種事件？」

受け取った、理沙はそのまま口に放り込むとコーヒーを飲んだ。

「そうなるね」

「実はね？この事件、京都でも起きてるのよ」

「京都？」

「茶道の師匠が細切れにされて殺された。その殺され方がそつくり
なのよ。警察が同一犯の犯行と見るに十分」

「被害者に関係は？」

「全くの無関係」

「物取り？」

「京都で無くなつたのは茶釜と壁に貼り付けられていたお面だけ
「茶釜と……お面？」

「そつ。お面は、関係者でさえ、今朝になつて無くなつていてのこと
に初めて気づいたほど、どうでもいい代物らしげけど」

理沙はコーヒーを弄びながら言った。

「不思議とね？さつき行った現場からもキツネの面が消えていたの
よ」

「……物取りかもね」

「そんなもの、どうするのかはよくわからんけど」

水瀬はそうぼやいて、コーヒーに口を付けた。

「そうでしょう？」

理沙はまるで同情してくれと言わんばかりだ。

「まあ」

水瀬は言った。

「」のテの糸は、普通の人間の使いこなせる代物じゃないから、犯人は推測がつくけどね

「？」

「魔法騎士か魔導師、もしくは呪具使い」

「つてことは？」

「お姉さん達の部署の仕事だね。特殊事件捜査班

だけ？」

「つたく、『冗談じやないわよ』

理沙は不平そうに言った。

「予算はないわ、権限はないわ。指揮系統ですら不明確。辞令受けた時、何て言われたと思う？」「ついに出世がなくなつたな」よ！？

全く、どうして私が」

「でも、警察が第三種事件に本格的に介入するつもりになつたってことでしょう？」

「あの戦争で、いやつてくらい妖魔見せつけられた宮内省と警視庁の妥協の産物よ。近衛軍がこれ以上、第三種事件で兵力を割かれたくないってね」

チラリと水瀬を見た理沙は言った。

「……この辺は、君の方が詳しいんじゃない？」

「知らない。でも、警視庁騎士警備部に対妖魔特殊戦闘班として創設したんだよね？確かに、お姉さんと岩田警部が指揮を執るんだよね？」

？」

「今ままじやあ、無意味に近いと思つてる。あの連中」

「なんで？」

理沙はため息混じりに言つた。

「キミ達見てるからよ」

加納萌子の日記より

だから「」の教室は嫌い！！
足が、

足が痛いよ……。

「大丈夫？」

心配そうに声をかけてくれた上に、わすつてまでくれるお姉様。優しいな。

やつぱり、あの暴力女とは全然違う。

「お姉様こそ、大丈夫ですか？」

「平気」

すっと立ち上がるお姉様。本当にスゴイ。けど……。

「本当ですかあ？」

つんつ。

軽くお姉様の足をつついた途端。

「凸凹#reverse!？」

声にならない悲鳴をかみ殺しながら、お姉様がへたり込んだ。痛そうに足を押さえるお姉様。

「だ、大丈夫ですか？」

お姉様は、ただ無言で首を横へ振った。

クールビューティーなお姉様。

やつぱり、立ち振る舞いも洗練されている。

そんなお姉様だから、やつぱり、我慢してしてるんだなあ……。

悪いことをしたと思つ。

葉月警察署内

「糸?」

理沙から報告を受けた若田が怪訝そうな顔で水瀬に訊ねた。

「糸とは?」

「不明です。ただ、切り口からして、人間の髪の毛より細いワイヤー……いえ。ワイヤーソーを想像して頂ければ、凡そ間違いではな

「いと

「人間の技術でも作れるな」

「操作ができません。一本ならともかく、複数を同時にコントロールするなんて不可能です」

「なぜ、複数本と？」

「一本なら力をかける場所にどうしてもムラが出ます。引っ張る力の強弱が生じますから。でも、複数本なら」

「成る程な。で、どんな呪具だね？」

「れい」

言いかけて、水瀬は口をつぐんだ。

力マをかけられたことに気づいた水瀬だったが、後の祭りだ。

岩田は何もないという顔で、

「　ま、今日はゆっくりしていってくれ

真っ青になつた水瀬の肩に手を置いた。

「カツ丼くらいにしてあげよう」

葉月警察署 地下

ガシャン！

水瀬の目の前で鉄格子が無情にも閉められた。

「お、お姉さん！？」

鉄格子越しに水瀬は抗議の声を上げた。

「い、これはあんまりでは！？」

「カツ丼、出してあげるからね」

ニンマリとした意地の悪そうな笑みを浮かべた理沙は、それだけ言つと留置所を出て行つた。

水瀬は困惑するしかない。

「脱獄つて、やつたら問題だよねえ？」

その気になれば、テレビポートでいくらでも逃げられる。

被害を無視すれば警察署」と破壊してもいい。

だけど。

「やつたら、怒られる程度じゃ済まないよねえ……」

どうしたものか。と、水瀬が目を閉じて思案に暮れかけた時、

「出せえええっ！――！」

誰かが叫んでいる。

「出すのじゃあああっ！――」

「うるさい。

「妾が何で人間風情に囚われねばならんのじゃあああっ！――」

あれ？どこかで聞いた声だ。

耳を澄ませ、相手がどこにいるのか確かめようとする。

どうやら隣の牢からだ。

「うわあああん！――出してくれえええっ！――」

怒鳴り声が涙声に変わった。

「かのん? ねえ、かのんじゃない?」

「え? だ、誰じゃ?」

「僕だよ。悠理」

「ゆ、悠理! ? な、なんじゃ、お前、」こんなとこひどいのなら、さつさと出してくれ!」

「どうか、僕もかのんと同じ立場なんだよ」

「……」

はあああつとこう大きなため息が留置場に響く。

数分後

「で? かのんはどうしてここへ?」

「店に泥棒が入ったんじや」

「泥棒?」

「そうじや、」主人様が保管していた大切な品がいくつも盗まれた。妻の厳重な監視下にあった店内から忽然と、じやー! 「れはきっとあれじやー! 怪盗、しかも大がつくような大物の仕業じやー! 」

「店番の時に居眠りしてて、気が付いたら盗まれていたんじやなくて?」

「な、何故知っているんじやー?」

「適当」

「クツ……」

「で、おばあちゃんに怒られて」

「うつ……」

「見つけるまで帰つてくるとか言われて、やむを得ずこいつへ」

「つつわ……」

「で、何かしでかして警察に捕まつた。と」

「うわあああああんつーーー! 妻はただ、マネ事をしただけじゃー! 何のー?」

「盗賊じやー向ひつが盗むなら、妻が盗んでも問題はないー! 」

「大ありじやないかなあ」

「じゃから、妾はめぼしい所にあたりをつけ、忍び込んだんじや」

「ちなみにどこへ？」

「大きな金庫じや。大日本帝国銀行券といつのがたくさん入つてい
た」

「看板に銀行つて書いてなかつた？」

「低位魔族語のスラングではギンコとは盜品のことじやー。」

「人間界の日本語での銀行は、ミラーシャの意味だよ」

「何！？」

「魔界で言えばグリンゴッツに盜品があるといつと変わんないよ
？」

「そ、そうなのか！？」

ちなみにグリンゴッツとは、魔界最大の銀行、日本で言えば帝国
銀行に相当する大銀行のこと。

なお、かのんが忍び込んだのは地方銀行に過ぎない葉月中央銀行
の大金庫だから、規模は当然違つが。

「かのん、音だけで判断したんだね」

「……はううううつ」

かのんは泣き叫んだ。

「どうすればよいのじやあああつー！グリンゴッツに忍び込んだなん
てご主人様に知られたらお仕置きじやあー三 木馬の刑じやああ
つー！」

「あのね？かのん。グリンゴッツは関係ない……」

「ムチで百叩きにロー クの刑に……ああつーホ ル踊りはいやじ
やあああつー！縛られて吊されるほうがマシじやああつー！」

「…………かのん、聞いてる？」

「“ほんてーじ”とかいう人間界の格好したご主人様が妾を縛り上
げてムチ片手におつしやるのじやぞ！？”跪いて靴をお舐め”と！
ああつーその度に妾がどれほど…………あたつー！」

パカンッ！

留置場の中に神音の悲鳴と軽い音が同時に響いた。

「？」

何とか隣を見ようとすると、当然、見えはしない。
ただ、

「ご、ご主人様！？」

という驚きを隠せない声だけが、何が起きたかを知る唯一の術だ
つた。

「おばあ、ちゃん？」

壁越しに凄まじい殺氣が水瀬を襲う。

まともに受けているかのんはたまらないだろう。

「かああのおおおんんんんん？」

地獄の底から響くような声が場の空気を凍り付かせる。

「ご、ご主人様、これはそ

居住まいを正し、弁明を試みるかのんを前に、引きつった笑みを
浮かべるかのんの主、神音かみねだ。

「誰が、コスプレして、あなた相手に楽しんでいることをしゃべっていいと？」

「やつちですか！？」

「さあいらっしゃい！商品を盗まれ、人間界で騒ぎを起した罪！
その体で支払つてもらいましょう！」

いいつつ、かのんの首根っこを掴むかみね。

「いやあああつー恥ずかしいのじやあああつー」
「あ、あの、おばあちゃん？」

「あら水瀬、お久しぶり」

声色だけは普段通りになるかみね。

「あの、事情を説明して頂けないでしょつか？」

そういう水瀬に、神音はにべもなかつた。

「また今度ね？今日はね？この子に隸従と被虐の悦びをたたき込む
という大切な仕事が」

「セーラー服着て先輩後輩プレイも、看護婦プレイや小児科プレイ
も…とにかく恥ずかしいからイヤじゃー！」主人様、せめてノーマル
で！」

ガンツ！

ひとりきわ大きな音がして、ついにかのんは沈黙した。

「あ、あの……？」

「コホンッ。水瀬

「はい？」

「今までのこの子の発言は、全て忘れなさい」

「は、はあ」

「そうしたら、耳寄りな情報を教えてあげます」

「耳寄りな情報？」

「申し入れは受け入れてくれますね」

「じゃ、まずその情報を」

「受け入れてくれますね？」

「つていうか、おばあちゃん、どこから

「う・け・い・れ・て・く・れ・ま・す・ね・？」

「……はい」

逆らうと無事では済まない。

水瀬はそう、判断した。

「じゃ、水瀬。また後日改めて。ああ、さつき樟葉だつけ？あの子
が警察署に入つたわよ？」

葉月警察署内 射撃訓練室

銃声が響き渡り、水瀬の耳元に着弾した。

「わーん！ 樟葉さん！ ひどいよおおつ！」

泣き叫ぶ水瀬はワイヤーで縛り上げられ、お腹の当たりに大きな的を貼り付けられていた。

「つるせえ！ 始末書だけじゃ飽きたらズ、警察の世話をなるたあい一度胸だ！」

銃声。

樟葉が水瀬という的めがけて撃った音だ。

的にこち当たっていいが、当てようとすれば当たる位置に着弾させている、つまり、わざと外していることだけは確かだ。

「近衛の恥をじこまでさらす氣だ！？」

銃声。

「せめて訳を聞いて下さあい！」

「オトコが言い訳するなー！」

銃声。

葉月警察署 特殊事件捜査班内

「これが、犯人だと？」

「はい」

難しい顔で田の前に出されたものににらみつけるのは、岩田だった。

「これが、どのよつに？」

「これです」

そう言つて、符がはられた筒から何かを取りだしたのは、着物姿のルシフェルだった。

「？」

岩田には、それが何だかわからなかつた。

何かの童話に出てくる、バカには見えない糸でも出されていくよ

うな、そんな気がした。

「手にとつてみてください」

「どれ？」

手の上に落とされたのは、細い糸だった。
かなり細い。太さは直系で〇・五ミリ以下だらう。

「？」

引っ張つてみるが、かなり強い。

「この釜の中に入っているモノがはき出した糸です」

「これで人間を細切れにしたというのか」

岩田の目の前には、星羅によつて封印された茶釜が置かれていた。
周囲は、ルシフェル田当ての男子職員が壁を作つてゐる。

「呪具、か」

触りもせぬ、ただ茶釜を見つめるだけの岩田。

「封印はしていますが、破壊は困難です」

「コンクリートで固めて日本海溝にでも沈めてしまつか」

「取り決めに基づき近衛で管理します。今日は、説明だけ」

「取り調べも出来ないのか？」

「茶釜相手に？」

少し驚いたという顔のルシフェルから視線をそらし、岩田は黙つた。

「つたく、第三種事件というのが、これほど厄介だとはな」

「今回の一見に関し、被害はなし……といいたいのですが

何故か、ルシフェルが肩を落とした。

「何か、あつたのか？」

「茶室からキツネの面が消えました」

「キツネの面？」

「はい。茶道の先生の母上が数十年前、購入したのを壁に飾つてい
たそうです。それが忽然と」

「……君が盗んだと？」

「いえ。さすがにそうは思われていません。師匠自身、偶然気づい

た程度で、無くなつても困りもしないそつですが……気になつたので

「わかつた。他にも気づいたことがあつたら適宜教えてくれ」

「今後、調査等につきましては、協力するものと聞いています。とにかく、水瀬君の釈放を認めて頂きたく」

「わかつた。といいたいが

ちらりとルシフェルを見る岩田。

「何ですか？」

岩田は理沙がいないことを確かめたあと、居並ぶ男子職員を代表して訊ねた。

「どこの飲み屋で働いているんだ？ 一度、顔を出したいんだが」

葉月警察署駐車場

「つたく、あのバカ息子！」

リムジンの後席で、樟葉が怒り心頭のまま言つた。

「警察に捕まつたなんて聞いたから、何事かと思つてきてみれば！」

「まあ、水瀬君のしたことは警察への協力ですし、水瀬君のおかげで持ちつ持たれつの関係が維持されていると考えれば

「……姉として心配したのよ」

ポツリと呟く樟葉。

「姉として？」

「私生活じゃただでさえ危なつかしい子だから、いつだって心配してるのよ？ これでも」

「私だって、戸籍上は水瀬君の姉です」とルシフェル。

「まあ、あんたのおかげで少しは心配が薄れて楽なんだけどや」「で、お互いにとつて不肖の弟の件ですけど」「？」

「トランクから出してあげませんか？」

第五話

千代田区某所地下施設第一ゲート前

「くたばれえええつ！」

ガガガガガガツ！

機銃座に据えられた12・7ミリと7・76ミリガドリング砲が火を放ち続け、圧倒的な火線を、そして曳光弾が龍の舞の如き線を描きあげる。

重装甲を施した戦車でも持つてこなければ防げる代物ではない。だが

「くそつ！」

それほどの火線を展開する機関銃部隊の兵士達は撃ち続けながら青くなっていた。

弾丸が全く当たらないのだ。

一分間に数千発の弾丸を撃ち続けているのに、当たらない。

その理由は、兵士達にはわかっていた。

「こいつ、騎士だつ！」

「トラップで仕留めろつ！」

「了解つ！」

兵士の一人が、機銃座の防御シールドに引っかけてあつたレバーを引いた。

バンツ！

鈍い音と共に、壁の一部が吹き飛び、反対側の壁に無数の弾痕があいた。

壁に仕込まれた指向性対人地雷が一斉に火を噴いたのだ。

「やつたか！？」

「違うつ！」

機銃にとりついた兵士は怒鳴った。

「まだ来るつ！」

「どうやつて！？」

「知るかよつ！　本部！騎士はまだか！」

千代田区某所地下施設 休憩室

地下施設には非常事態を告げるアラームが鳴り響き、近衛騎士達が武器を手に配置につく。

『侵入者警報！警戒コンティショナをAに引き上げ。各員警戒、防御隔壁緊急閉鎖。警備担当部隊は速やかに所定の配置についてください。非戦闘員はマニュアルE所定の』

「（）へ？どこの物好きだ！」

休憩室でコーヒーを飲んでいた若い騎士が同僚に毒づきながらも、腰の剣の具合を確かめた。

「よつほど死にたいんじゃないのか？」

「そういうな」

同僚は肩をすくめると、壁にかけてあつた大薙刀を手にして軽く振つた。

「（）の意味を知つていれば、普通は攻めたくなるもんさ」「警護中隊各員に告ぐ！」

アラームをかき消さんばかりの野太い声が、各所に仕掛けられたスピーカー一杯に響き渡り、駆け出そうとして止まつた。

『既に侵入者はトラップ及び第一ゲートを突破。第二ゲート防衛隊との通信途絶！』

「なつ！？」

『“奥の院”への侵入は絶対に阻止せよ！既に第一、第二防衛部隊は全滅！』

第三防衛線の配置についた騎士達はぎょつ。とした顔でスピーカーを見た。

『承明門を最終防衛線に指定！騎士はすべて承明門に集結！いいか』

！死んでも通すな！』

それから10分後

「ぎやつ！？」

暗闇の中から現れた敵に一斉に襲いかかった騎士達が、逆に一斉に吹き飛ばされた。

「ぐうつ！」

先程の若い騎士もその中の一人。

まともに地面に体を叩き付けられたショックで息が止まった。

「　くっ」

痛む体を無視して、立ち上がろうとした彼は、自らの体に起きた変化に目を見開いた。

体が　　動かない。

指一本、まともに動こうとはしない。

「な……何故？」

魔法か？

一瞬、そう思つたが、彼の知識はそれを否定した。
自分の身につけている甲冑は対魔法戦闘を前提とした代物。
電撃や麻痺系の魔法がこの甲冑の前に有効なものか！

だが　　では？

「コツ……コツ……コツ

不気味なまでの静寂の中、靴音だけが妙に高く聞こえる。
指一本動かすことの出来ない彼の横を誰かがすり抜けよつとしていた。

「く……くそつ」

何とか動く目で、彼はその相手を確かめよつとした。
そんな馬鹿な！

その姿を認めた彼は、呆然とその人物の動きを見つめるしかなかつた。

「彼は知つていた。
その相手が誰かを
だからこそ、信じられなかつた。」

否。

信じたくなかった。

「ひ……姫さん？」

ギギギ……ツ。

かつてのその人物の愛称を口にした彼の目の前で、最終防衛線に指定された承明門。そう呼ばれた扉が開かれたのは、その直後だつた。

「ば……馬鹿な……」

翌朝。

水瀬が警察から引き取られ、重賞倉にぶち込まれた翌日のこと。水瀬とルシフェルは萌子の母親に呼ばれ、とんでもないことを告げられた。

「茶釜に逃げられた？」

「そう。ものの見事に」

地下施設の警戒が普段以上に厳重で、よつやくたどり着いた場所は茶室。

茶釜から聞こえる湯の音は、ただ聞いているだけで心地よくなる。そんな中、

「あのねえ！」

バンツ！

萌子は畳を叩いて怒鳴った。

「お母さん！」

「ママ」

「どうちでもいい！」

「よくないわよお」

萌子の母は不服そうに言った。

「相手の名前つてのは、大切な意味があるのよ？だから」

「言靈の講義なんて聞きたくない！そんなことしてる場合じゃないでしょーーー？」

「そう？」

不思議そうな顔をして娘に茶を勧める母。

「そう？って」

萌子はアゼンとした顔で田の前の母を見た。

「どうしてそんなに落ち着いていられるの？」

「あり？良いところに気づいたわね」

母は微笑みながら言った。

「ちゃんと対策はあるからよ」

「対策？」

「そう。釜の中に居場所を知らせる呪符と、爆発する呪符を貼り付けておいたの。ほら。これ」

血漫気に一枚の呪符を見せつける母に向けられた頬もしそうな視線は、すぐに不審のそれに変わった。

「やっぱり、私って天才だわあ」

「あの……」

「天才って、何しても上手くいくのよねえ」

「だから……」

「何？」

「なんで、貼り付けた呪符がここにあるの？」

「……」

「……」

「……」

呪符と萌子の顔を交互に見比べた母は、不思議そうに言った。

「なんでかしら？」

「つまり」

「茶をすすつた水瀬が言った。

「呪符を貼り付けたから安心だと思つて、そのままにしていたら、いつの間にか逃げ出していた。と？」

「そう。懐かしい娘が訊ねてきてくれたから、嬉しくてねえ」「娘？」

「そう。久しぶりに田本へに来たといって。一時間も話し込んだわ」

「お客様があつたんですか？」

「お客様と言えばお客様ねえ」

「はあ？」

「だつて、こことの結界破つて、止めよつとした警備騎士さん達も、死ない程度で何人ものされるし。何より、誰かに操られっぱなしになつたから。誰かなつて」

「ここ、襲われたんですか？」

確かにおかしい。

侵入者を排除・迎撃する強力な結界が張られ、警備も近衛の選りすぐりが配属されている、日本、いや、世界的に見ても有数の警戒厳重区域だ。

水瀬ですら手こずる防衛体制。

それをぐぐり抜けて、出ていった者がいる？

しかも、無血で？

「る、ルン？」

「水瀬君、現実とアニメをいつかやにしない

「……といつよつ

ルシフェルは首を傾げた。

「……へン」

「へん？」

「そうでしょ？」

茶を呑む萌子の母の手元をじっと見つめながら、ルシフールは言った。

「それほどの騒ぎで、どうして私達に動員命令が出なかつたの？どうして、その騒ぎが私達の耳に届かないの？」

「……そういえば」

「あら？ 一人とも、聞いていいの？ 昨晩の騒ぎ」

「はい」

「何も」

「……ふうん？」

萌子の母は少し考へた後、ぽつりと言つた。

「まあ……無理もない……か」

「あの……ママ？」

怪訝そうな娘の声に、萌子の母はびっくりして娘の顔を見た。

「う、ううん？ 気にしない気にしない！ 痛いの痛いの飛んでけーっ！」

「！」

「はあ？」

「それより、話したわよね？ ママは

「へつ？」

「その娘が“誰かに操られっぱなしだった”って

「……なんでわかるの？」

「“視れば”わかるでしょ？ 萌子ちゃんだって、私と由忠様の血を引いているモンスターなんですから」

「娘をモンスター呼ばわりするなあつー！」

萌子が暴れるのも無理はない。

実の母親からバケモノ呼ばわりされて、娘が喜ぶはずがないだろう。

う。

だが、母親はにっこりとほほえんだ。

「かわいいじゃない。ママ、あの電気トカゲとか大好き」

「……私……私は……」

滝のような涙を流す妹の頭を撫でながら、水瀬は訊ねた。

「それで、その操っている人って、わかつたんですか？」

「ええ。懐かしい人よ。まだ生きているとは思わなかつた」

「……心当たりが？」

「もちろん」

萌子の母は自信満々に頷いた。

「だ、誰です！？」

「面識は一度しかないけどね？『白拍子』って呼ばれているわ

「白拍子？」

「そう。知らない？男装の遊女が今様や朗詠を歌いながら舞うの」「そつちは知っていますけど……」

「あのさあ

萌子があきれ顔で訊ねた。

「つまり……ママのご親戚？」

「磯禪師(いそのぜんじ)とは血縁なかつたはずだけど？」

「じゃなくて！」

「よ、よくわかりませんが」

妹が暴れ出そうだったので、水瀬はさっさと結論を出すことにした。

「その侵入者は、その“白拍子”に操られていた。ここまで突破出来たのは、その“白拍子”的ですな？」

「ううん？あの娘の力」

「……え？」

「だから、あの娘の力よ」

「だ……誰ですか？」

「教えない」

「どうして？」

「教えてやつたら、私が樟葉ちゃんに怒られるもん」

「……何故、樟葉さんが？」

「樟葉ちゃんがあなた達に教えていない。そこに何か裏があると思うのが普通でしょ？」

萌子の母は言つた。

「何より、ここではあなた達は樟葉ちゃんの部下なんだから」

「……」

「まあ、あの子が茶釜の蜘蛛を持って行つたのは間違いないけど」「どうして止めなかつたんですか？」

「面白そつだつたから」

「……」

にべもない返事に、水瀬は一の句が継げなかつた。

皇室近衛騎士団 樟葉の執務室

「昨晩、あそこに侵入者があつたことは把握している」

水瀬とルシフェルを前に、樟葉は冷たい視線で、

「それがどうした」

「……あの」

「同時に、何か呪具が奪取されたこともだ」

「僕達」

「既に他部隊が奪還任務に従事中だ。それと、あそこの一いつては、厳重な箝口令が敷かれている。お前達も近衛の一員なら、その意味を正しく理解しろ」

「……あの？」

「下がれ。私は忙しい」

革張りの背もたれの高い椅子に腰を下ろした樟葉の目は殺氣立つ

ている。

その眼光に気圧され、樟葉の横に立つ篁副官の氣の毒そうな視線に励まされるように、二人は敬礼の後、樟葉の部屋を出た。

パタン。

「……ハウツ」

樟葉は一人が部屋を出た途端、力尽きたように椅子の背もたれに体を預けた。

「全く……なんて事態よ」

「侵入者に関する情報は、これを除いて、すべて抹消せました」

篁副官が執務机の上にDVDを置いた。

「現地の全部隊への記憶操作は本日1500までに終了」

「……馬鹿げている。そうは思わないか?」

「無理もありません」

DVDの上に突っ伏した樟葉に篁副官は複雑な感情を浮かべた顔で言った。

「あの地に侵入を許したこと。そして、その侵入者の素性……この二つが近衛内部に広がれば、とんでもないことに」

「……その最悪に輪をかけてくれそうなのが今、目の前から消えてくれた……」

「私も、あの子とのことは、噂でしか知りませんが」

「噂だけで十分よ。本当、真実をあの子が知つたら悪夢よ?何しろ

「ストップ」

カチッ。

篁副官が、樟葉の言葉を止めるなり、机のボタンを押した。ドアの開閉ボタンだ。

「きやつ!？」

「わつ!?」

突然、ドアが開いたせいで部屋に転がり込んできたのは、水瀬と

ルシフェルだ。

ドアに耳を押し当て、樟葉達の会話を聞いていたのは間違いない。

「お前等」

「……つまり」

樟葉の執務室前でバケツを持つルシフェルが横に立つ水瀬に訊ねた。

私がいいって言つまでそうしてろ！」

樟葉はそう怒鳴つて一人にそう命じた結果だ。

「その侵入者つて水瀬君の知り合いだってことだよね？」

「白拍子に知り合いなんていたかなあ……？」

両手どころか頭にまでバケツを乗せられた水瀬は首を傾げようとしてやめた。

「でも……」

「やっぱり、ヘンだよね？」

ルシフェルでも、そう思わざるを得ない。

「樟葉さんは、侵入者があつたことそのものをもみ消そうとしている」

「責任問題になる？」

「責任はあるだろうけど、そんな姑息なマネする人じゃないでしょう？」

「……おかしいよねえ」

「しかも」

ルシフェルはそこに一番ひつかつた。

「近衛に関係した人だつたみたいだね」

「そうだね……近衛追放された人かな？」

「うん……でも」

バケツの水をこぼさないよう脚を軽く動かしたルシフェルは呟いた。

「どうして、樟葉さんはその侵入者から水瀬君を遠ざけようとするんだろ？？」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3810e/>

茶釜と狐と怨霊と

2010年10月9日01時24分発行